

池田外交のリアリズム

日米同盟はいかに作られたか 「安保体制」の転換点1951-1964 吉次公介著



(講談社・1575円)

私たちは薄氷の上を歩いている。一方で戦争放棄を謳った憲法を支持し、他方で在留米軍を許容し、自衛隊を認め、最近では国連の常任理事国になろうとしている。これは私たちの「だらしなさ」でもあり「したたかさ」でもある。

こうしたジレンマにひとつの回答を試みたのが本書である。沖縄国際大学准教授の著者は、日米安保の定着期・安定期としての池田政権（一九六〇―六四年）に着眼している。日米安保と聞いて池田勇人の名を連想する人は多くはないであろう。池田の首相在任は、安保改定を強行した岸信介と沖縄返還を成し遂げた佐藤栄作の狭間の時期であり、やや地味な印象すら受ける。しかし、このような印象論を退ける迫力が本書にはある。池田は日米の「イコール・パートナーシップ」を基調とし、日米安保を軌道に乗せ、開発援助を通じて東南アジアへの経済外交を展開した。国力に見合った「負担」を求めるアメリカに、軍事協力ではなく経済的貢献で応接したのである。日米関係を「対米従属」として捉える見方が一般には膾炙しているが、これは国際関係の理解としては一面的であろう。池田外交の「リアリズム」はもっと正当に評価されて良いはずである。

日本の外交には哲学がないとよく言われる。しかし外交は哲学になつてはならない。哲学は自己の研鑽であるが、外交は「他者」との対話である。対話の目的は、相手の意見を「変えること」であつて、叩き潰すことではない。対話には勝利も敗北もない。あるのは説得と妥協である。外交はしばし夫婦間の関係に喩えられるが、それは外交のこうした性格を見事に示している。著者が言うように、日米関係とは「対立と妥協」の過程である。私たちは日本外交の「だらしなさ」に落胆するのではなく、寧ろその「したたかさ」から多くを学ぶべきではないだろうか。本書を閉じた時、共和政ローマの政治家キケロの言葉が想起された。私たちに求められているのは「賢明な思考」よりもなお「慎重な行動」である、と。（九州大准教授 大賀 哲）